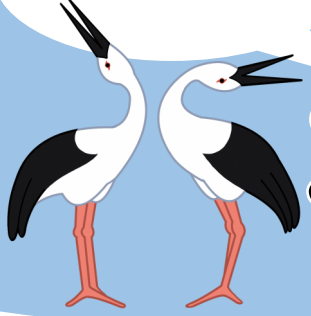


コウノトリ



毎週月曜日更新

カタカタ通信

第180号

「最終章」

2025年6月9日

しみじいと呼ばれ早十数年。動物に携わる仕事は約半世紀、コウノトリの飼育は、22年。メスの花との付き合いも、花が生まれた時から10年を超えました。

コウノトリのペアリング（繁殖のために、オスとメスを一緒にすること）はかなり難しく、やっとペアになったのが空と花です。2羽のペアとしてレベルは、少しずつ確実にアップしてきました。



巣材を運ぶ空と花



雪の日もしっかり抱卵していました

初めての産卵は2023年でした。花の産んだ卵は3個とも無精卵で、腐敗してしまいました。雨等の影響で腐敗した可能性があったので、その後の対策として屋根やシートで巣台の上を覆うことを考えました。ですが、鳥は頭の上の様子の変化には特に敏感です。繁殖期はさらに神経質で警戒してしまう場合もあります。2羽に対するストレス等を考慮して、屋根は付けないことに決めました。

また、抱卵の途中で産んだ卵を回収し、ぎ卵（にせものの卵）と交換することも考えました。本物の卵は親鳥の代わりにふ卵器であたため、ふ化前に親に返す方法です。前述の卵の腐敗の対策にもなるのではという考えもありました。有精卵か無精卵かを早めに判断できるので、無精卵だった場合には托卵（たくらん・この場合はふ化させたい卵と取り換えて親に返すこと）も視野に入れました。空と花には子育ての経験がありません。一度経験を積むことで、今後有精卵を産んで、繁殖に繋がってほしいと思いました。

今回の繁殖では実際に托卵を行い、空と花ははじめて子育てを経験することができました。結果としてヒナは育ちませんでした。空と花にとっては、この経験はとっても貴重なものになったと思います。

天空の里としても飼育係としても、さらに経験を重ねることができました。

例えば、巣の場所について。空と花が巣を作った場所が壁の近くだったので、これでは狭いのではないかという意見がありました。ではその場所から離してみようと試みましたが、やはり元の場所がよかったようで、その年は産卵もなくなりました。強制的にその場所をふさいでしまうことも考えましたが、産卵する花の選んだ場所を優先し、元の場所に戻しました。

ヒナ用エサとして与えたドジョウについても、小さなころはエサもできるだけ小さいサイズを探してもらって与えていました。成長にあわせてエサのサイズも変えていきました。大ききの違うドジョウが一緒に入ったとき、親鳥は小さいサイズを選んで与えるだろうと思っていましたが、小さいドジョウは何度も追いかけていて捕まえづらいようでした。



た。ヒナは親鳥からもらうエサに大きめのドジョウがあっても、気にする様子なく食べていました。

今回の繁殖で、空と花の課題はもっとたくさんヒナへエサを与えることだとわかりました。一度に吐きもどす量も、その回数もまだ足りないようでした。これも子育てをさせていなかったら、わからなかったことです。

今回ヒナが育たなかったことは、決して失敗ではありません。空と花と飼育係と、今後につながるようみんなでベストを尽くしたと、亡くなったヒナや過去に関わった担当動物たちにも誓います。

これからは、どうしたら改良していけるか考えながら来年の春に向かいます。



次の春を見据えて

天空の里 鴻巣市コウノトリ野生復帰センター

飼育担当：しみじい